
欲望者と阻むもの

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

欲望者と阻むもの

【Nコード】

N0475F

【作者名】

i m a i w a

【あらすじ】

欲望者、欲望のままに剣を振りかざし、気に入らない奴を抹殺する。それを阻む者がいつか現れるのだろうか。

（前書き）

ダークグロテスト作品です。 気が向いたらいつか連載するのかな？と疑問符がつく作品です。 荒いかと思われます。

俺は武器屋の平凡な夫婦の間に生まれた。

何不自由なく暮らしてたつて言ったら、嘘になるだろう。

金持ちでもなければ、土地持ちでもない。

そんな夫婦からは最低限のものしか与えられなかった。

「晩飯は堅いパンが1個あるから食べな」

ふん、まあ食えるだけましさ、しかしよ、もう少しいい暮らししたいぜ。

ネズミがちよろちよろ徘徊する俺の自室。

古びた木の床、ギシギシうるさい丸い木の椅子。

ベッドの上には汚れたシーツ、飲み物やら、食べ物をあそこで食うから、汚れたままだ。

桶から水を汲み取り、バケツにいれてそれを擦るんだが、ちつとも綺麗になりやしねー。

俺の母はそのベッドのシーツを見て、「臭いから捨てたら？」と一言蔑んだような目を浮かべて、洗うコツなど教える事もしないで、ほったらかしていく。

ああ、なんで俺はこんな境遇で生まれてきちまったんだ！

そんな苛立ちを怒気を含みながら体中に鬱積する毎日を、もうどれくらい送ってきただろうか？

しかし、そんな糞つたれな生活が終る時が刻々と迫っていた。

俺の部屋に父親が入ってきやがったんだ。

ただ入ってくるだけなら、こんなことにはなりやしなかった。しかし、そいつは、この俺に「家を出ていけ」と生意気に言いやがったんだ。

俺は怒りのまま父に反論した、いやだとか、そんな事言わないで、とかそんな消極的なセリフは吐かねえ。

こう言ってやったんだ。

「うるせー！ お前殺すぞ？」

「俺を追い出せるものなら死ぬ気でかかってこいや！！」

そしたら父は、狂ったように怒り、椅子を投げつけてきた。

俺の膝小僧にそれが当たると、激痛とともにとんでもないドス黒い気が体に渦巻き始める。

「お前親にどういいう口聞きやがるんだ！」

俺は咄嗟にベッドの横にあった、長剣をつかみ親父の首元を掻っ切ってやった。

ぶくぶく言いながら、血を噴出し、その場で白めを向いて息絶えようとする親父。

「ははは、ざまみろ、この糞豚が！」

「あんた！」

母のお出ましだ、地面で無様な死体を晒す父を見て、青ざめた顔をして突っ立っていたが
そのうちその視線が俺に向けられた。

「グラフィアーあんたがやったの？」

「なんてことを」

赤い血糊がついた長剣を目にして、母は体を小刻みに震わせながら、動揺と恐怖が両立する表情で俺に喚き散らす。

「そつだよ、俺がやったよ、それがどうした？」

「なんてことを？ 警察を呼ばないと！」

母がそついい放った瞬間、後ろから長剣を振りかぶり、縦に振り下ろす。

肉を切る感触とともに、母は背中から鮮血を俺に浴びせかけ、その場で苦悶の表情を残して息絶えた。

「はははは、邪魔者抹殺してやったぜ！」

「ざまみろ！くそつたれが！」

.....

~~~~~10年後

俺は親と暮らしていたトランス村を離れ、別の地にいた。

一人で地を這ってでも生きていく決心をし、なんでもやった。

この世の全てを切り裂くために、暗黒魔道の師について10年間血の滲むような努力？ いんや違う！ ただ、強さを求めた。我が欲望を阻む全てのものを打ち滅ぼし、そのドス黒い欲望を必ず満たすために、強くなりたかった。そして強くなった。

「お前は十分強い」

「そのドス黒い欲望かなえて周りなさい」

「はい、師匠、そうします」

こんな俺が、なぜ10年間も暗黒魔道の師とは言え、他人に教わることが続けたのか？

それはこの師ファウストが、俺と似たような境遇で、しかも同じように親殺しを決行し、

その後、人里離れた山奥で仙人のように暮らし、そこで腕を磨き、暗黒魔道を自力で編み出した男であるからかもしれない。

それに何より、こいつは上から物を言わないし、押し付けがましい事を言った事がない。

常に俺の意見を流し、尊重し、否定をしない。

そんな彼と抗う展開になるはずがなかった。

師匠に挨拶を終え、下山した俺は、馬鹿みたいに広い草原にでた。行く当てもない。食料も僅か。水ももう残り少ない。

途方にくれようものなら、一日だって生きていけない、そんな場

所で俺は待っていた。

虫の這う苔が繁殖した倒木に尻を置いて、辺りを魔法で強化した視力をもって、どんなものも見逃さないように、息を凝らして、獲物を探す。

「馬車だ」

ガキ二人、しょぼくれたおっさん、そいつの奥さん。

目に入った奴等の顔はそうだな、旅行気分どこかへいく途中つてそこか。

幸せそうな顔してやがる。

だが、これからお前たちがその目でみるのは地獄の一丁目だぜ。

黒い外套を引っつかみ、上に羽織った俺は、馬車の進路を計算し先回りして、奴等がくるのを茂みの中でじっと待つ。

息を凝らし気配をたった俺は、いわば獣。どんな者にも気づかれる事はないだろう。

気づいた時には相手は死んでいる。

「母さん、町まだ？」

「はいはい、もうすぐよ、中に入っていないさい」

「最近このへんは野党が出るって言うから」

「ははは、父さんがいりゃ大丈夫さ」

「父さん頼もしい」

「ハハハハハ」



女のガキ、坊主、父、母、位置も、武器の有無も確認した。武器は父親が隣に置いてある猟銃のみ。

わけないな。

殺すぞ。

俺は馬車の進路沿いにある、高い木の上に移動することにした。猿が這うようにすらすら上る。木登りは暗黒魔道の使い手なら誰でも出来る。

暗黒魔道即ち、暗殺を生業とする者が使う魔道。木登りは必須だ。理由はしらんがな。

3秒だ

木の下を馬車が通りがかった時、その車体の上に飛び乗った。

屋根の上から身を乗り出し、親父の喉をタガーで掻き切る……1  
それをみて仰天した母親に声をあげる間も与えず、タガーを持ちかえ、胸に突き刺す……0.5。

終わりだ、ミッションは終わった。

3秒は多すぎたか、ガキは数のうちに入らん。

父親と母親の死体を馬車から地に蹴り飛ばすと、馬の手綱を握り席に腰掛ける。

後方からガキのピーピー泣き喚く声が聞こえるが、気にしない。後で殺すか、野に捨てるかだからな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0475f/>

---

欲望者と阻むもの

2010年12月17日02時38分発行